丸井織物

経糸短繊維使い強化へ

機能とカジュアルを融合

合繊織布国内最大手の丸井織物（石川県中能登町）は今後、エアジェット（AJ）織機の機能を活用したカジュアル素材の開発に力を入れるとともに、委託、自販、東レ合繊クラスターを三つの商流ととらえ、事業拡大に臨む。

同社は今年1月に、既存のウオータージェット（WJ）織機48台をAJ織機に入れ替えた。2002年に初めてAJ織機2台を導入して以降増設を続け、現在は計189台体制にまで拡大。これを事業拡大に生かす。

宮本徹社長によると、今上半期（2016年1～6月）は受注高、売り上げ、利益ともに計画通りに推移したものの、「下半期以降は厳しくなりそう」とみる。店頭不振や為替変動を背景にアパレルなどがモノ作りへの慎重姿勢を強めており、低価格品へのニーズも高まっている。「先行き不透明感はかなり強まっている」が、推進中の中期経営計画「革新200」を軸に「自分たちのできることを着実になしていく」ことで難局を乗り切る。

難局打破のための施策の一つがAJ織機を活用した素材開発と提案強化。02年の初導入以来、AJ織機を活用した新たな素材開発に着手、経糸長繊維、緯糸短繊維使いなど「ノウハウを蓄積してきた」。今後は経糸短繊維、緯糸長繊維の素材開発にも取り組み、それをボトムやシャツ、ユニフォームなどに向けて提案する。合繊織物で培ってきた機能性にカジュアルテイストを加えることで新たな商機をつかむ考え。ただし、「餅は餅屋の観点から短繊維100％の領域には踏み込まない」。

継続出展する「プレミアム・テキスタイル・ジャパン」でもこうしたカジュアルテイストの中肉素材が好評で、自販事業として実成果に結び付いているという。自販だけでなく、合繊メーカーからの委託事業にも波及しており用途開拓が進展。今後は水平、垂直の連携を進める東レ合繊クラスターでの素材開発、販路開拓と併せ、「商流を有機的に組み合わせる」ことで事業拡大を狙う。

TES有資格者が拡大

丸井織物は人材の高度化、専門化の一環として数年前から繊維製品品質管理士（TES）の取得を社員に奨励しているが、「紡績、織物・編み物・不織布」のカテゴリーでの企業別有資格者人数が3位となるなど成果が出ている。

TESのウェブサイトによると現在の有資格者は7186人。業種別では「アパレル」が27・4％で最も多く、以下、「検査機関」14・2％、「商社、卸」11・2％、「紡績、織物・編み物・不織布」9・3％と続く。

同カテゴリーの中での企業別の1位は東レの35人。2位がSHINDOの34人で、丸井織物は30人で3位に位置する。

宮本徹社長によると同社では数年前から人材育成の一環としてTESの取得を奨励、試験費用も会社の経費から捻出している。